

# 『寝言家族』

脚本 遠藤雄史

## 【登場人物】

田口良彦（二八） 盛岡市にある老松鑄造の製造担当  
安藤海翔（一九） 老松鑄造の製造担当  
原幹夫（三九） 老松鑄造の製造部主任  
白鳥 鷹造（五一） 老松鑄造の製造担当  
小原千晶（四二） 老松鑄造の総務担当  
菊池涼子（三〇） 老松鑄造の品質管理担当  
松本和佳子（二四） 老松鑄造の営業担当  
田口純也（四一） 良彦の父親（幽霊）・阪神淡路大震災で被災し死亡  
田口花江（四〇） 良彦の母親（幽霊）・阪神淡路大震災で被災し死亡  
田口美鈴（一八） 良彦の姉（幽霊）・阪神淡路大震災で被災し死亡

## 幕が開く前

青い幻燈の世界――

舞台中央に炬燵――

炬燵の上にはいくつかの折鶴と折り紙

炬燵の周りには座布団――

舞台奥には二階へと続く階段――

舞台下手奥にはソファ――

そこにリュックを背負い、作業着に身を包んだ田口良彦が現れる――

良彦はどこか疲れ切った表情をしている――

遠くで風が鳴る――

良彦はリュックをソファへ近くに置き、炬燵に入る――

そして、折鶴を黙々と折り始める――

しばらくすると突如、地鳴りが聞こえてくる――

――地震――

良彦は鶴を折るのをやめ、息をひそめる――

揺れが大きくなる――

良彦はゆっくと立ち上がる――

揺れが激しくなる――

良彦は天井をみつめる――

暗闇が部屋を包み込む

幕が開く――

田口良彦の夢の中

十六年前の田口家（一九九五年一月十六日の夜）

良彦は寝ている

その様子を見ている父、純也と母、花江。

炬燵の周りには影たち

影たちの服装は黒い山高帽に外套。その姿は宮沢賢治のようでもある。

影1 アンパンマン：

影2 アンパンマン：

影3 アンパンマン：

影4 アンパンマン：

純也 これ：

影5 アンパンマン：

花江 寝言ですよ

影6 アンパンマン：

影7 アンパンマン：

純也 そうか：

良彦と影たちは突然体を起こし――

良彦・影たち もうキビダンゴは食べられません！

純也 ！？

また、寝に入る良彦と影たち。

良彦 もう食べれないよ

影1 どきんちゃんにあげてよ

影2 それオフサイド

影3 しんぱん！

影4 あんぱん！

影5 ファールファール

影6 キビダンゴは友だちさ

影7 ア〜ンパ〜：（ンチ）

純也 ―最後まで言えよ。

花江 寝言ですから。

純也 いろいろ混ざってるな。

花江 相変わらず賑やかな夢ね。

良彦 え？ 痛い痛い！ 頭むしるのやめなよ！

影1 | あ！ 痛がるならやめればいいのに！

影2 え？ くれるの？

影3 無理無理！

影4 アンパンのあんこはささ：脳みそでしょ？

影5 臭そう！

影6 かがない！ かがない！

影7 | ！？ やめてやめて！ 押し付けてこないで！

皆 先生、いちいちこっち来ないでください。 来るなく！

影7が外套と山高帽を取る――

すると影7は、良彦の姉、美鈴となっている。

美鈴は純也たちの方へ駆け寄る。

美鈴 お母さん、良彦うるさい！

花江 お姉ちゃん、起きてきたの？

良彦と影たちは「来ないでください」「あっち行ってください」と吠えている。  
その様子をあきれた様子で見ている姉の美鈴。

美鈴 寝れないし。

純也 聞いてると面白いぞ。

美鈴 (無視して) 何で部屋で寝ないの？

花江 | 何でかしらね。

良彦 切符！？―持っていないよ！―あ：リトマス試験紙なら：あります。 緑色  
ですけど：

良彦と影たち | (大爆笑)

良彦 それはクラムボン！

美鈴 | ちよっ―

花江 お姉ちゃん。

美鈴 |。あたし、明日早いんだけど。

純也 ああ、自己採点か。

美鈴 そ。

純也 大丈夫なんだろ？

美鈴 もち♪ | お父さんより早く叶えるから。

純也 そうかそうか。

花江 ほっというて寝なさい。

美鈴 わかった。

美鈴は階段を上ろうとすると――

良彦 上はだめだ！

美鈴は驚いて止まる。

影たち 本当にあなたのほしいものはなんですか？

影たちはゆっくりと立ち上がる。

美鈴 なに？ ホントわけわかんない夢みてるんだから。

良彦 落ちる――

美鈴 なに、その不安な寝言！ 失礼しちゃう！

美鈴は気にせず階段を上がっていく。

影1 ぼくはロックスターになりたい

良彦 だめなんだって：

純也 どんな夢を見てるんだろうな。

花江 どんな夢なんでしょう。

影2 私は翻訳家になりたかった

花江 ―この子はあなたや美鈴と違って寝てる時の夢が鮮やかですから。

花江はそう言って、良彦に毛布をかけ、優しく頭をなでる。

影3 私は童話作家になりかった――（立ち上がる）

影4 私はパティシエー（立ち上がる）

影5 私は売れて裕福に――

影6 私はみなが幸せに――

花江 今日は上がれないのね。

純也 ん？

花江 なんでもありません。

良彦 ―母さん：

純也 呼んでるぞ。

花江 寝言ですよ。

純也 そうか。

遠くで銀色の汽笛が聞こえる。

その汽笛が聞こえているかのような二人。

影たちはめいめいに「銀河ステーション」と小さく呟く

花江 さ、私たちも寝ましょう。

純也 明日、早いのか？

花江 ええ。

純也 |すまないな：

花江 |めずらしい。

純也 美鈴が合格したとなると、かかるだろ。

花江 それはね。

また汽笛が鳴る。

純也 なあ—

影たち (めいめいに舞台上を速足で歩きまわりながら) 銀河ステーション！  
銀河ステーション！

そして、部屋から消え去っていく。

その様子をただ見ていた花江はふいに—

花江 私の夢でもあるんだから。—寝ましょう。

良彦 寝ちゃだめだよ：夢が見られなくなる：

純也 おかしなこと言うやつだ。

花江 明日の朝、素直に学校に行けるといいけど：

純也 (不思議そうに花江を見る)

花江 ほら。

純也 ああ：

純也と花江は部屋を出て行こうとする—

良彦 (不意に立ち上がり) 父さん！

純也 おやすみ。

良彦 母さん！

花江 良彦が良い夢を見られますように：

二人は部屋から出ていく。

部屋の外から影たちの声が聞こえる

影たち 「ほんとうにあなたのほしいものはなんですか？」

良彦 : 俺は：

影たち 「ほんとうにあなたのほしいものはなんですか！？」

良彦 俺なんか：

影たち 「ほんとうにあなたのほしいものはなんですか！？」  
良彦 どうしてー

影たち 「ほんとうにあなたのほしいものはなんですか！？」  
良彦 どうして俺だけ：

良彦は呆然と立ち尽くす。  
そして、暗闇が部屋を包む。

二〇一一年三月一日。生松鑄造休憩室。  
暗闇から声が聞こえてくる。

小原 ちょっと、その角はしつかり合わせなくちゃ。

松本 …。

小原 和佳ちゃん。

松本 はい。

小原 あなたに言ってるの。

松本 あ：すみません：

小原 和佳ちゃん、見かけによらずあれね。

松本 …？ なんですか？

小原 ええ？ だからーあれはあ！ あれでえ！

田口良彦が夢から覚める。

部屋の様子が見えてくる。

炬燵に座っているのは、良彦の同僚の小原、松本、菊池。

三人とも折鶴を折っている。

炬燵の上には折り紙と折られた鶴。

床には完成した鶴を入れる大きめの段ボールと失敗した鶴を入れる小さめの

段ボール（ダメ鶴ボックス）。

壁には二〇一一年三月のカレンダー。

良彦は休憩室のソファで寝ていたようだ。

良彦には毛布がかけられている。

小原 あれよお：

松本 え？

小原 （自分の額を指さし）ここまで来てる！

菊池 不器用。

小原 そう！ 不器用！

菊池 おでこだともう通り越してるから。

小原 通り越す？ どこを？

菊池 …あ、これやり直し。

菊池が折鶴をダメ鶴ボックスに入れる。

小原 (ダメ鶴ボックスから取り出し) これだあれ? だれ折ったの? だれ?  
(よく見て) …あたしだ。…。涼子ちゃん、だめ?

菊池 だめ。

小原 品質管理課はこれだからっ! 和佳ちゃんも、気を付けて。

松本 はい。(目覚めた良彦に気づき) おはようございます。

良彦 (目を背ける)

小原 ぐっちい、起きたの? 休憩時間だから寝ていていいのよ!

菊池 小原さんの声がかいんしょ?

小原 なに、それ? (涼子に) わたしのせい? (良彦に) わたしのせい?

良彦 ……。

小原 わたしのせい!?

良彦 (仕方なく手を横に振る)

小原 ほっら!

菊池 (相手にせず) 夜遅いのはいつものことだけども、ここずっと、朝も早

いんしょ? 大変なの?

良彦 |まあ…

小原 |あれでしょ、今年の十二月に出す予定の—あ、あ、…(おでこをおさ

え) なんて、名前だっけ? ここまで出てるのよ! …あ、あ…あ

松本 アクア。

小原 (同時に) アララ! —ん?

菊池 アクア。

小原 アクア、そう、アクア! (指を鳴らそうとするが鳴らずに) おしい!—

鳴らない…。(和佳子に小声で) この部屋乾燥してんのよ。

松本 ……。

菊池 「アララ」じゃ、売れないっしょ。

小原 「あたら、うまく止まりませんでした!」 的なね!

小原、一人で大爆笑。

菊池 今度の新型って「プリウス コンパクト」でリリースするって話もあつ  
たっしょ?

松本 そうでしたね。

小原 (ダメ折鶴を炬燵の中央に置き) プリウスC!

菊池 (ダメ鶴ボックスに入れ直し) |ロールアウト不可。

小原 えええっ?

菊池 アクアで決まり?

良彦 そうみたいです。

菊池 名前なんか、下請けの下請けには関係ないけど。

小原 (もう一度ダメボックス内にある自分の鶴を取り) : 涼子ちゃん。―あたし、製造じゃない。

菊池 できる。

小原 : ぐっちい。お願い。

菊池 休んでなつて。

小原 お願い!

良彦 : はい。

菊池 やった♪

菊池は折り紙を良彦に渡す。

良彦は炬燵には入ろうとせず、空いている床で折ろうとする

小原 またそうやって! ほら、ぬぐだまって(温まって)!

菊池は良彦を強引に炬燵に入れる。

良彦と松本、菊池は鶴を折り始める。

小原はその様子と完成した折鶴の数を見ながら―

小原 ―(段ボールに入っている折鶴を見て) 頂はまだ遠い:

松本 ですね: 安藤くん、いつでしたっけ?

小原 三月いっぱいだけ、有給消化分があるから、来週の金曜日まで。

松本 十一日ですか。

小原 新たな旅立ち。本願成就を願って鶴を編むつてか。

菊池 アクア、プリウスよりも燃費良いって話だけど、できんの? 3じゃなくて5ナンバーって話つしよ。総重量、二百ぐらい軽くなるわけだから。

小原 それで、ウチの部品も軽量化目指してるんですよ。

菊池 それにしたって、根詰めさせすぎ! ―(良彦に) しょっ!?

良彦 : 大きなところは白鳥さんが考えてくれてますから。

小原 雁さんとぐっちいなら、少しぐらいの軽量化、大丈夫よね。管理部は出来上がったものだけ、検査してればいいのお!

菊池 (小原を睨む)

小原 (素知らぬ顔で鶴を折っている)

松本 親からの通達だとリッター40目指すって話です。

菊池 はあん? どんなエンジンよ?

小原 鉄の塊が空を飛ぶ時代だからね。

菊池 ―飛行機関係ないっしょ。

小原 涼子ちゃん、そんなに角立てないの。まだ乾燥してんだし、♪お肌お肌の曲がり角♪

菊池 : :



小原 ♪曲くがろうか 曲がろうよ♪

菊池は無言で小原が持っている折鶴を握り潰す。

小原 ああああ!?

菊池 プリウスよりも燃費良くて、それで小型ってさー

小原 涼子ちゃん:

菊池 (折鶴を投げ捨て) 自業自得。

小原 (折鶴を拾い上げ) あああ:

菊池 親は、んな寝言みたいなこと言うだけでいいけど、あたしら下々がどんだけ大変かってわかんないんだよ。

小原 (撫でながら) あああ!

菊池 :はい。(自分の折っていた鶴を渡す)

小原 涼子ちゃん。

菊池 ーんで、

小原 (鶴をまじまじと見て) ー上手ね。

菊池 実際どんだけ軽くすんの?

良彦 5キロです。

菊池 5!?

小原 (良彦を見る)

良彦 トランスアクスル全体では8なんですけど、生松製造で作る部品はは5キロです。

小原 それは:かなりね。

菊池 信じらんない:下請けの下請けだと思って、いつでも切ってやるっていう魂胆しょ。

小原 切る!? ぐっちい、お願い! ウチの子、四月から高校なの。まだ、辞められない。

松本 高校入試終わったんですか?

小原 三月九日だから、来週。受かるって言ってるんだけど、どうなんだか:

松本 ドキドキですね。

小原 そうなの!

菊池 で、どうなの?

良彦 試作品はできたんで、とりあえず今朝、金ヶ崎に出しました。

菊池 金ヶ崎?

松本 アクアは金ヶ崎で作るの確定らしいです。

小原 関東自動車でやるんだ。

松本 はい。

小原 部品はオール岩手、オール東北? って感じ?

松本 そこまでは:

菊池 検査してないけど。

良彦 原さんが。  
菊池 へへ。

小原 朝からいらないのはそれで。今日、何するか決めるって言ったのにな。  
松本 そうでしたね。

良彦 (不思議そうな顔で小原たちを見る)

松本 安藤君の送別会でする余興。

菊池 それもさー余興って、別にいいっしょ。

小原 いいじゃない。

菊池 安藤抜けて、ライン回るの？

小原 一応、求人を出してる。

菊池 どうせ、来てないっしょ？

小原 早い時期から出してるけどね…。いいじゃない、夢を追い求めて、仕事辞めるって。ねえ、ぐっちい！

小原 ぐっちいはどうなの？ 何か夢はあるの？

良彦 :

菊池 飽きたー！

小原 ちよっと！

菊池 これ、千羽作んなくていいんじゃない。

小原 ダメよ！ 千羽鶴なんだから！

菊池 だいたい、千羽鶴ってー

小原 涼子ちゃんはそのやって文句が多いの。

菊池 別に、祝いたくないってわけじゃないよ。ーでもさ、他にあるっしょ。

小原 夢を叶える的なグッズ？ ミサंगाとか？

小原 軽い、軽くて小さい。

菊池 大きさの問題？

小原 大きい方が気持ちこもって見えるでしょ。ーだいたいね、言わせてもらえば、各々家で折ってこようって言ったけど、全然だったでしょ。ーだから、こうして昼休みを使ってやってるわけ。本人に見つかるかも知れないってリスクを負いながらも、こう、折ってるわけよ。

菊池 家に帰ったら無理っしょ。酒飲んで寝るもん。ーつか、ここで折る？ 入ってくるっしょ。

小原 その辺は抜かりありません。「安藤入室禁ず！」って張り紙貼ってあるもの！

安藤 良彦さん！

安藤が入ってくる。

小原 安藤！？

安藤 (小原に) ちーすっ！ (良彦に) 原さんと雁さん、呼んでまっす。

良彦 え：

安藤 何してるんすか？ 鶴？ みんなで鶴折ってんすか？

小原 あ：うん。そうね、これは鶴。立派な折鶴。

安藤 折り紙って：小学校以来？ あ、それ代わります。

良彦 悪い。

安藤 なんか、急ぎみたいっすよ。初号機のことじゃないっすか？

小原 初号機？

安藤 エヴァ風に言うとの的な。(笑う)

良彦は休憩室を出ていく。

安藤は周りに気にせず、炬燵の中に足を入れて

安藤 あったけく。なんか、入口に「安藤入室禁ず！」って入ってこいたな振りがあったんすけど、あれなんすか？

小原 そっちねく。

安藤 どのタイミングかって迷ってたんすよ。そしたら、ちょうど良く。―来週、息子さん高校入試じゃないすか？ 大丈夫すか？

小原 うん：大丈夫。

安藤 (笑う) やべっ！ これって：どう折るんでしたっけ？ (松本の鶴を覗き込み) あ、こうだ：こう。―和佳子さん、手つき超いいっすね！

松本 ―ありがとう。

小原たちは気まずい雰囲気。

四人、少しの間黙々と折る。

安藤は飽きたのか、不意に立ち上がる。

安藤は松本、菊池、小原を見る。

三人 …。

安藤 …。

安藤はカレンダーを見に行き、

安藤 あと十日か？

三人 …。

安藤は三人を見て、また、カレンダーを見て―

安藤 (さつきよりも大きな声で) あと十日か？

三人 …。

安藤 ちよっと、何すか、この静かな雰囲気！？ いづくねっすか？ いずいっすよね？ えく、俺、もう少しでお別れだから、みんなと話したいっす。

三人 . . . .

安藤 . . . . つか、何で鶴折ってんすか？ おかしくねっすか？ え？ まじ、集中してんすね？ あ、あ、あ！ ピンと来た！ ピンと来た！ これ、原さんお得意のライン効率化のためのアイディアすよね？ こう、休憩時間に鶴折って、集中力？—コンセンション？高めましよ的な。

三人 . . . .

安藤 正解すか？

三人 . . . .

安藤 違うんすか？

三人 . . . .

安藤 え？ 鶴っすよ。良いオトナが休憩時間使って鶴っすよ。バカみたいじゃないすか？ あ、みなさんのことを言ってるんじゃないんすよ（笑う）—原さん、発信は合ってるんすよ—合ってるんす。—原さ：あ、ピンと来た、これ来た！ これ、千羽鶴すよね！ 願掛け的な！ これ、きつと、ニュージーランドに。

小原 —ん？

安藤 ニュージーランド。知りません？

安藤はオールブラックスのハカの真似をしてみせる。

小原 （腕をつかんで）しなくていいから。

安藤 うす。

小原 どうしてニュージーランド？

安藤 先週地震遭ったじゃないすか。

小原 —うん。—あれ、先週か。

安藤 そうすつよ。だめっすよ、忘れちゃ。日本人、すぐ忘れんす。俺、忙しすぎるのがよくないと思ってるんすよ。日本ってリサイクル早いじゃ—（笑う）リサイクルじゃないっす、サイクル早いじゃ—

小原 うんうんうん。それは、分かった。それでね—

安藤 どうしてってことすよね？ だから、復興祈願、的な。俺ら、なんもできなないけど、なんか心は繋がってる的な。俺ら作ってる製品の原料、お隣のオーストラリアから輸入してるし、そんな遠くないっすか。ほら、日本の留学生もたくさん亡くなったし。

小原 安藤：あんた良い奴なんだよね。

安藤 え？ なんすか？ 別に良い奴じゃねっすよ。高校からタバコ吸ってたし—

小原 うんうんうん、それはいい。

安藤 はい。

小原 あたしたちね、いろんな理由があって、鶴折ってんの。

安藤 ニュージーランドじゃないんすか？

小原 残念ながら違う。

安藤 そうすか。

小原 その気持ち大事だと思う。

安藤 はい。

小原 でも、これは違う。

安藤 はい。

小原 それに、うくん、見られちゃったってのはあるんだけど、こっそりやり  
たい。

安藤 しつぽり。

小原 |こっそり。

安藤 (嬉しそうに) はい。

小原 それに、締め切りもある。

安藤 (嬉しそうに腕を開いて) 開放。

小原 (それをしめて) 締め切り。

安藤 (嬉しそうに) はい。

小原 |それでね、集中したい。

安藤 コンセントレーション。

小原 コンセント：あんた、ホント男のくせにうるさーこれね、あんたのため  
に作ってんだからね！

松本 小原さん！

小原 あ！？ 言っちゃった！

安藤 ? 俺のため？ どういうことすか？

菊池 あたしトイレ。(出ていく)

松本 あ、私も。(出ていく)

安藤 どういうことすか？

小原 あ、あたしも急にもようしてきたな。

安藤 (小原の腕を掴み) 小原さん！

小原 もれるから！

小原は安藤の手を振りほどき、勢いよく部屋を出ていく。

安藤は一人残り、炬燵の上の折鶴を見る。

そして、部屋の隅にある段ボール箱に入っている折鶴を見る。

応接室。

原が扉を開け入ってくる。

原 入って。

良彦 失礼します。

安藤 (誰のための折鶴か気づく) !?

原 |雁さんも。

白鳥 失礼いたします。

休憩室では安藤が嬉しそうに折鶴を一つポケットに入れて、部屋を出ていく。

原 田口君さ、こっちにご家族いるっけ？

良彦 ーいえ。

原 あ、いや、そういうことじゃなくてね。親戚とか…すまんね。ちよつとデリカシーなかったな。ー大丈夫、最近、地震のニュース多いけどーほらニューズーランドの。

良彦 ……。

原 あ、すまん。

良彦 ーいえ。あの、試作品、だめだったんですか？

原 いや、すこぶる良い。好感触。ま、あれで決まりかな。

良彦 そうですか。

原 いや、雁さんと田口君が頑張ってくれたおかげだよ。疲れたる？ 疲れた

よな？ 先週からずっと、ここに詰めっぱなしだったんだって？

良彦 大丈夫です。ーそれで、話って？

休憩室では、あるはずのない階段から良彦の母親、花江が降りてくる。

その階段は十六年前の震災で倒壊した田口家の階段なのだろう。

花江は炬燵に入り、黙々と鶴を折り始める。

原 良い話しなんだよ！ すこぶる良い話し！ 金ヶ崎の工場に本社からも役員来ていてさ、緊張したんだけどねー私の話しはいいか。それで、試作品の出来が想像以上だったようで、びっくりしてたよ！

良彦 そうですか。

原 ここからが本題。ー田口君さ、本社行かない？

良彦 ーえ？

原 愛知県。ー本社の開発チーム専属の技術者でどうかって！ びっくりした？ びっくりしたよね？ 抜擢も抜擢、大抜擢だから！

良彦 白鳥さんじゃ？

原 雁さんとも話し合ったんだけど、君だろって。

良彦 (白鳥を見る)

白鳥 (良彦を見ない)

原 だから、最初にご家族の話を。確か、お祖母さんは…

良彦 3年前に。

原 丁度良いってわけじゃないんだけど、君をしばるものは何もないんだし、どう？

小原 (声) ここかな？

菊池 (声) そうじゃない？

松本 (声) 応接室に入ったって。

原 ？

扉をノックする音。

原 はい！

小原 失礼します。ーいた。原くん、大変なことに。

原 え？

小原 鶴折ってるの、安藤にばれた。

原 ばれた？

小原 しかも、自分で自分の鶴折ってる。

原 どうして？

小原 とりあえず、ちよつと来て。(出て行く)

原 ー悪い話じゃないから考えておいて。ーね。ー(小原に) 分かり易く説明してくれる？

原は応接室から出ていく。

良彦 白鳥さんじゃないんですか？

白鳥 私じゃないですよ。

良彦 だってー

白鳥 本社が求めているのは、技術者ー職人です。

良彦 だったら。

白鳥 私はセールスマンです。

良彦 …。

白鳥 良い話だと思いますよ。ーおめでとう。

白鳥は応接室を出ていく。

一人応接室に残る良彦。

そこに、亡くなったはずの父と姉が休憩室に現れてクラッカーを鳴らすー

純也 やったな良彦！

美鈴 愛知でしょ！ 美味しいモンって言ったたら、味噌カツ、煮込みうどん、

手羽先、天むす…ひつまぶし！ あ、あたし、ウナギはダメだ。ーウナギは

父さんにあげるね！

純也 ウナギかあ…何年も食べてないな。最後に食べたのいつだ？

花江 いったったかしらね。

美鈴 うなぎ嫌い！ それよりハム！

純也 良いモン食べさせてないから、貧乏舌になっちゃってな。

美鈴 でも、たれは好き！ ごはんにたれで三杯はいけるな！ あ！ あたし、天井って天かすしかのってないと思ってたからバカにされたんだからね！

純也 すまん！ これも父の体たらくぶりが原因よ！ ―どこで本物を知った？

美鈴 高校。チーちゃんが―

純也 ちーちゃん？

美鈴 友達。ちーちゃん、天井、弁当に持ってきたん。

純也 天井を弁当に！？ 神戸の高校生つつうのは、なんつうだろうな…感じ悪いな！

美鈴 それで、ウチ―

純也 そのエセ関西弁やめい！

美鈴 神戸弁です。

純也 ぐぬぬぬ…！

美鈴 お母さんにお願ひしたんよ！ お弁当、天井でつて！

純也 まじか！？ それで！？

美鈴 美味しかったあ！ エビが―まあまあおつきかったあ！

純也 母さん、俺も食べたかった。

花江 仕方ないでしょ。―あなた、書いてるとき、ほとんど食べないじゃない。

純也 それでも、出してよ。

花江 ごめんごめん。

純也 美鈴！

美鈴 なに？

純也 出せ！ 天井出せ！

美鈴 一つの話！ もう、消化しちやつて！

純也 いいから出せ！

美鈴 ちよつと！ やめてよ！

父と娘の楽しいげな鬼ごっこが始まる。

良彦 うるさく！

純也と美鈴は静止する。

純也 夜中誰も居ないとはいえ、ここ工場だから。

純也・美鈴 すみません。

良彦 …まだ居たの？

純也・美鈴 え？

良彦 まだ居たの？

純也 居たよ。―なあ。

美鈴 うん、居た。―でも、久しぶり？

純也 ああ、そうだな。―いつだった出たの？

美鈴 バレンタインデー！



純也 そうだそうだ二週間前。――良彦が初めてチョコ貰った――  
良彦 初めてじゃない。

純也 と、本人は申ししておりますが、まあまあまあ。

美鈴 はいはいはい。

純也 で、誰だっけ？

美鈴 ―事務の――

純也 おしとやかな――

美鈴 あ――

純也 ん――

花江 ワカちゃん。

純也・美鈴 (手を叩きながら) ワカちゃん！

美鈴 あれだつて、ホントはウハウハなくせして、「俺、そういうのいいから」  
とか言つてさ。――付き合いたいくせに。――中学生か！？

純也 それでどうなった？

良彦 どうにもなつてない。

美鈴 はあん？

良彦 みんなにあげた中の一つだから。――そういうの関係ないし。

美鈴 どうみても違つたけど。

純也 情けない。

良彦 それはいいから。――なんで居るの？

純也 え？ 言ってるだろ！ お前を応援に来たんだつて！ なあ！

美鈴 あたしは、どうでもいいけど。

純也 こら！ そういうことを言うんじゃない！

花江 美鈴も鶴折りましたよ。

美鈴 (しぶしぶ)は――い。

純也 父さんも折る。

美鈴と純也も炬燵に入つて鶴を折り始める。

良彦 それ、安藤の千羽鶴だよ。

純也 構わん構わん。

良彦 ダメだつて。

美鈴 安藤つて、ロックスター夢見て仕事辞める子でしょ。――ホントはさ、あ  
あいう子を見習つてほしいんだけど。――あたしやお父さん見てたら、夢の一  
つや二つ追いたくなるんじゃないの？ 宮沢賢治のような全世界で翻訳され  
る童話を書くことを目指した――無職の父。

純也 大変苦労をかけました。

美鈴 第二の戸田奈津子！ いや、全ての映画のクレジットには「田口美鈴」  
とあたしの名前が出るような翻訳家を目指した偉大な姉。とんびが鷹を生む  
を体现したかのような存在！

純也 棘がある。

美鈴 貧乏のせいで現役合格を強いられたから。

純也 すみません。

花江 いいじゃないの。

美鈴 そうやって、すぐにお父さんの味方して。

純也 夫婦だもん。

花江 そっちじゃなくてねー

純也 あれ？

花江 良彦。ー夢をもつのも大事。でも、一生懸命生きるのも大事。ーがんばって働いたのが認められたんだから。そうでしょ？

良彦 ……

純也 天晴！ あの作文の通りになったな。

美鈴 作文？

純也 書いたろ。五周年記念式典だかに寄せて書いた作文。持っていたかな…

純也が良彦のリュックのポケットの中を探しー

純也 あったあつた。 ほら、亡くなった家族の分まで一生懸命生きるのが自分の役割だつて。

美鈴 あつたね。

純也 父さんの血、引いてるんだな。良い作文だった。ー愛知県かく。楽しみだな。ー母さんの千羽鶴持って行けよ。きつと偉くなる。

美鈴 お父さんが初めて賞取ったのも、お母さんの折鶴効果でしょ！

純也 ん？ 父さんもがんばったんだぞ。

美鈴 まあまあ、それは、はいはい。

純也 よくないだろ。

美鈴 でも、あたしもセンター完璧だったはず。お母さんの折鶴効果！

花江 そう？

美鈴 ただ会場に折鶴持って行ったのは、ちよつと恥ずかしかった。鞆に千羽鶴吊るしてんのあたしだけだったし、周りの目が痛かったー

純也 あれは持ち歩いて効果があるんだ。ーお前、前日、緊張で腹ピーピーだったろう。

美鈴 それは言わないで！

純也 ずっとトイレにこもってたもんなく。

美鈴 やめてー！

良彦 あのさ！

純也 あ、静かにだったな。

良彦 そうじゃなくて…俺、行かないと思う。

純也 え？ なんて？

良彦 行かないと思う。

純也 なんて？

美鈴 始まった。

良彦 なんだよ？

美鈴 良彦のウジウジ。ウジウジ君。

良彦 ウジウジ君ってなんだよ？

美鈴 肝心な時になるとウジウジウジウジ。そうなるかなって思ってたんだよ  
ね。

良彦 ……

純也 他にやりたいことあるのか？

美鈴 あるわけないでしょ。

良彦 ……

純也 んじゃ、なぜいかん？ お前には面倒見なきゃならん家族もおらんだろ。

良彦 ……

純也 良彦。

良彦 俺じゃないと思う。

純也 ん？

良彦 本社が欲しいのは俺じゃない。

純也 それじゃ、誰だ？

良彦 雁さん―白鳥さんだよ。俺と一緒に開発していた人。あの試作品だって  
雁さんがいなくなったらできなかつたし―俺よりもできるし―主任だってわか  
ってるはずだよ。―本社に相応しいのは雁さんだって。

純也 泊まり込んでまで試作品と向き合っていたのはお前だろ。お前が開発し  
たんじゃないか。胸をはれ。

良彦 試作品のために泊まり込んでいたわけじゃないよ。

純也 ん？

良彦 それに、今、俺が抜けると大変なんだ。安藤が抜けて、俺まで抜けると  
ラインがまわらなくなる。―試作品にOKが出たところからが忙しくなるん  
だ。―みんなに迷惑はかけられないよ。

純也 迷惑と感ずると思うか？ この人たちがそう感ずると思うのか？

美鈴 わかんないよ、良彦には。―ずっとうじうじして、周りと関わろうとし  
なかつたんだから。

良彦 だって―

美鈴 あゝあ、つまんない。―鶴折っても無駄みたいだし。あたし上行ってる。

純也 美鈴。

美鈴は階段をのぼって上に行く。

純也 良彦。

良彦 ……

純也 お前、これ（作文を見せる）…

良彦 ……  
純也 ……もうちょっと考えてみる。―母さん、一服してくる。  
花江 どうぞ。

純也は作文をリュックへと戻し、休憩室の入り口ではないところから消えていく。

良彦 ……  
花江 ……一緒に折る？  
良彦 うん。  
花江 ……これ、安藤君に？  
良彦 ……うん。  
花江 ……そう。  
良彦 ……うん。―母さん、明日も居る？  
花江 ……居ますよ。  
良彦 ……うん。

暗闇が部屋を包む。

二〇一一年三月四日金曜日。夜。休憩室。  
良彦が入ってきて、あたりを見回す。  
そこに花江が階段から下りてきて―

花江 ……おかえりなさい。  
良彦 ……―ただいま…。  
花江 ……遅くまでごくろうさま。お腹空いたでしょ。―リンゴでも食べる？

美鈴が階段から下りてきて

美鈴 ……お母さん！ 甘やかしちや、いかん！  
良彦 ……(迷惑そうに)なに？  
美鈴 ……なにだあ？ こいつ、ちっとも反省しとらん！  
良彦 ……反省って―何を？  
美鈴 ……けつの穴から手突っ込んで奥歯―  
花江 ……美鈴は？  
美鈴 ……―いる！

花江は一度、休憩室から出ていく。  
美鈴は良彦の向かいに乱暴に座り、良彦を睨みつける。

良彦 ……（鶴を折り始める）

美鈴 （ものすごい表情で睨みつける）

良彦 ……。（黙々と鶴を折る）

美鈴 （さらにもものすごい表情で睨みつける）

良彦 ……。

花江 あらあら、にらめっこ？

良彦 そう。

美鈴 違う！

花江 ケンカしないの。

花江は炬燵にリンゴを置く。

花江 食べなさい。一日一個のリンゴで医者いらずって、栄養満点なんだから。

美鈴 病気にでもなあってしまえ！ ダメ彦！

良彦 ダメ彦ってなんだよ？

美鈴 ダメ彦はダメ彦でしょ！

花江 美鈴はカルシウムね。

美鈴 炒り子。

花江 炒り子？ 炒り子は―切らしてるわね。

美鈴 うそ。いらぬ。

花江 そう、カリカリしないの。

美鈴 カリカリもするじゃない！

良彦 ……で、父さんは？

美鈴 あんたのせいで寝込んでる！

良彦 （あからさまにめんどくさそうな表情）―

美鈴 何、その顔！ 文句を言いたいののはこっち！ ―思いだしてみ！

小原、菊池、松本が現れ、同時に話し始める―

小原 ぐっちい、すごいじゃない！ 本社から声かかるなんて、びっくり！ 行

くんでしょ？

菊池 田口、すごいじゃん。愛知からよばれるなんて、びっくりだよ。―行

くんだろ？

松本 田口さん、すごいですね。本社から声かかるなんて―。行くんですよ

ね？

美鈴 そう聞かれて、なんて答えた？

良彦 え？ いいじゃん、別に。

美鈴 「あ…いや…俺なんか行っても…」

小原 何、謙遜してんのよう！

菊池 何、照れてるんだよ。

松本 そんなことないですよ！

良彦 見たのかよ？

美鈴 いやでも目に付くわ！ —あんた、俺が抜けるとどうとかって言っているだけだよ—

小原 若いんだから、チャレンジ！ 送別会盛大にするから！ また、鶴折らなきやう！（消える）

菊池 —ラインの心配なんかしなくて行って。雁さんいるっしょ。あたしも入れるし。さ、仕事仕事。（消える）

松本 寂しいですけど—あ、安藤君と田口さんが一気に抜けるとってことですけど—でも、仕方ないです：応援してます！

松本 は行こうとするが、立ち止まり—

松本 —もしよかったら行く前にご飯でも、—いえ、あの、と、友だちが美味しいって言ってるお店があつ—

美鈴 ……

松本 忙しいですよ！ ごめんさない！

松本 はかけていく。

美鈴 もつたいない！ 明らかに—明らかでしょ！

良彦 違うよ。一人で行き辛いから—

美鈴 あんた、どういう思考回路してんの？ —（花江に）脳みそくさつとる。—後ろ向きにもほどがある！

良彦 普通だよ。姉ちゃんの方がおかしいんだ。

美鈴 小学校の頃からなんも変わつとらんね。安藤って子、見倣い！

安藤 疲れた〜お疲れ様です。

安藤が休憩室に入ってくる。

美鈴はその様子をソファに腰掛けてみている。

花江は黙々と鶴を折っている。

良彦 お疲れ。

安藤 （鶴折っているのを見つけて）あざっす—つか、いいすよ。良彦さん、初号機で疲れてるじゃないっすか。つか、まだ改良してるんすよね？

良彦 ちよつと強度がさ。

安藤 俺も折るっす。

良彦 いいって。

安藤 俺のじゃないっす。—良彦さんのっす。本社から声かかっているって。すげえっす。ばねっす。—俺も負けてらんないっすわ！（笑う）

良彦 安藤。

安藤 大丈夫っすー間に合うっす。あと、一週間しかいないっすけど、超Bダ  
ッシュで折るっすから。神速っすよ、俺。残像みせちゃうっす。(折り紙を早  
く振り) 残像拳！(笑う)

良彦 そうじゃなくてさー

安藤 ツッコミ！ 良彦さんのツッコミ！ 超レア！ 辞める直前にいいの貰  
ったす。あざーす！(笑う) んで、なんすか？

良彦 俺の鶴はいらないよ。

安藤 なんですか？

良彦 行かないから。

安藤 は？ 行かないんすか？

良彦 行かない。

安藤 ぶるってんすか？ 大丈夫っすよ！ 良彦さんの腕、確かっすから！

良彦 | 安藤さ、夢追ってどうすんの？

安藤 ビックになるんす。永ちゃんみたく、偉大なロックスターになるんす。

俺のソウルフルな歌で、武道館いっぱいにするんす。| あ、夢じゃなくて目  
標っす。だつて、夢は見るもんで、目標は達成するもんじゃありませんか。これ、  
人の受け売りっすけど。

良彦 だつたら、なんで就職したんだよ。

安藤 あく、そうすよね。俺、正直ぶるってたっす。無理だろうなって思っ  
たっすーかっこ悪いけど。だから、就職したっす。| 去年の夏、先輩が事故  
で死んだんすよ。| 通夜で、死に水っていうんすか？ あれ、やってるとき  
に、なんか、無性に怖くなって：信二さん、あ、その先輩なんすけど、先生  
になる気してて、岩大に行ってたって聞いて。| なんか、俺、このまま死に  
たくねえって。人生一度きりじゃないすか。| 良彦さんもなんか、夢ー夢っ  
て言っちゃった(笑う) 目標あるんすか？ だから、行かねんすか？

良彦 | ないよ。

安藤 だつたら。

良彦 安藤さ、似てんだよ。

安藤 へ？

良彦 家族に。| みんな夢見てた。父は童話作家| 宮沢賢治みたいに世界で翻  
訳されて、世界の子どもたちに読んでもらうんだって言ってた。姉は翻訳家。  
母は、二人の夢が叶うことを願って鶴を折ってた。

美鈴 …。

花江 …。

安藤 しびれるファミリ―っすね！ 今、どうなってるんすか？

良彦 死んだ。

安藤 え？

良彦 十六年前、死んだ。

安藤 | 事故かなんかすか？

良彦 地震。母の仕事の関係で神戸にいてさ。

安藤 |なんて言っていないんすかね？

良彦 なんか言ってもらいたいわけじゃないからさ。

安藤 でも、でも、でも、なおさら、良彦さん、なんかいいんすか？ |良彦さん、助かったわけっすよね？

良彦 ……

安藤 やっぱり本社行き、チャンスじゃないすか！ 亡くなった家族の分、がんばる的な！

良彦 ……

原 田口君！

原が血相変えて入ってくる。

安藤 おつかれっ！

原 どういうこと？ どういう|ちよつと雁さんも入ってきて！

白鳥が入ってくる。

原 ね、ね、ね、どうということ？

安藤 何がっすか？

原 本行かないってどういうこと？ なんで？ なんで？ なんで？ 自分で、自分で勝手に本社に電話しちゃったの？

安藤 まじっすか？

原 びっくりしてたよ！ びっくりしてた！ 私もびっくりした！

良彦 すみません。

原 謝ってすむ問題じゃないよ、うん、すまない。あのね、社会人でしょ？ まず、上を通すつてのは筋なわ|いや、筋論を言いたいわけじゃなくてね、このなんつうだろう、なんつうだろうね、雁さん！

白鳥 はあ？

原 雁さんからもなんか言ってる、ガンって。

安藤 ちよつ、主任、洒落すか？

原 (ものすごい剣幕で)洒落じゃないよ！

安藤 すんません！あ、俺、コーヒ|買ってこようかな？

安藤は逃げるように休憩室を出ていく。

原 あのさ、田口君、何か問題あるの？ あるなら言ってよ。私のメンツつてもあるんだあ。君がいきなり本社に電話するのと、私が電話するのでは違うわけ。違うんだあ、これが。|私としては、行って欲しい。本社とのパイプが確立するのは、願ったりかなったり。もちろん、田口君の気持ちって



のは尊重するよ。尊重する。でもね、こんな良い話ってのは、ないわけ。盛岡みたいな地方に居て、本社から声がかかるってのは、宝くじに当たるともんなわけ。ウチは、もともと鉄器作って、雁さんとか頑張ってくれたけど、伝統とか良い物をとか、時代に合わなくなってきたいて、私が、部品製造にシフトさせたわけ。苦しいけど、何とか軌道に乗ってきたときに、田口君の引き抜き。渡りに船ってこのことなんですよ。―田口君が断ったことは、私が頭を下げて、なかったことにしています。

良彦 え？

原 どうしても行けない理由ってある？ ある？

良彦 ……

原 (咳払い) 何も人身御供として行ってくれて言ってるわけじゃないんです。―君にとっても、工場にとっても、ひいては、日本の自動車界にとっても良いことなんです。このことを考えて、もう一度、冷静に考えてみて欲しい。

そこに松本が入ってくる。様子がおかしいことに気づき、戸惑うが―。

松本 あの―

原 なに？

松本 関東自動車からお電話です。

原 分かった。―雁さんからも言ってやって。ガンって。

原が出ていく。

松本 (良彦を見ている) ……

白鳥 大丈夫ですよ。

松本 ……はい……

松本が出ていく。

白鳥 (折鶴を一つとり) 私、みなさんに任せっぱなしにしました。

良彦 すみません……

白鳥 どうかしたんですか？

良彦 ……

美鈴 謝ってばかりで、かっこ悪い。

良彦 俺にそんな価値はありません。

白鳥 (静かに笑いながら) 人身御供。ま、言葉としてはなんですけど―主任が言っていたことは言っていたこととして、君が誠実に仕事と向き合っていた結果です。胸を張っていいと思います。

良彦 でも雁さんの方が。

美鈴 あんたはいつつも煮え切らん。雁さんだって、あんたのことを認めてくれるのに。

白鳥 言ったでしょ。私はセールスマンだと。私は良い物を―作り手として、自分が目指すものを作るのはやめたんです。鉄器をやめたのときに、職人としての私は死にました。部品なんか、誰から見えない―そんな物に魂はこめられない―って。しかし、君は違う。君は没頭している。―一生懸命生きている。―君は行く価値がある人間です。

良彦 ……

白鳥 もう少し、考えてみてください。

白鳥が休憩室を出ていこうとする

美鈴は良彦の前に立ち、白鳥に話しかける。

美鈴 一生懸命生きていますか？

白鳥 ……

良彦 (美鈴を見る)

美鈴 (良彦を見て) ねえ、どんなつもりで聞いたの？ 意味わかんないんだけど。(白鳥に) ―俺―

美鈴・良彦 一生懸命生きてるように見えますか？

白鳥 ―私はそう感じています。

良彦 一生懸命生きるってなんですか？

白鳥 ……

良彦 ―一生懸命生きなくちゃいけないんですか？

白鳥 (静かに笑う) 今の私には難しい質問だよ。

白鳥が休憩室を出ていく。

良彦は炬燵の上に乗っている折鶴を見ている。

花江はいつの間にか鶴を折るのをやめている。

美鈴 がっかりだよ…ホントがっかり。―お母さん、それでも良彦を応援しなくちゃいけないの？

花江 ……

美鈴 ―あたしは、神戸に引っ越して聞いたとき、本当に嬉しかったん。こんな田舎じゃなくて、都会に住めるんだって。新しい街、新しい友達、新しい生活が待ってるって。あたしらが住んだのは、駅の近くだけど、三宮からは離れていたし、シャッター街も多かったじゃない。それでも、外国人多くて―ああ、この人たちと話せたら面白いんだろうなって…。漠然と生きていた夢がはつきりした。翻訳家になるって、言えるようになった。お父さんは相変わらず全く売れないから、ずっと苦しい生活だったけどあたしの未来が拓けたって感じた。―あたしは、一生懸命勉強したんよ。私大は無理だし、

浪人も無理だし、現役で合格しなくちゃって思っていたから。センター、手ごたえばっちり！ 学校で自己採点するの待ち遠しかった！ でも…あたしの夢はあの日に終わった。突然、何の前触れもなく終わった…。一九九五年一月十七日午前五時四十六分五十二秒。激しく揺れたと思った瞬間…参考書がつまった本棚に押しつぶされた。そして、あたしの部屋が下で寝ているお父さんとお母さんを押しつぶした…。良彦、「一生懸命生きなくちゃいけないんですか」ってどういうこと？

花江 美鈴。

美鈴 ねえ、どういうこと？

良彦 ……。

美鈴 教えてよ！

良彦 ……

美鈴 ……なんで、あたしやお父さん、お母さんが…

良彦 ……

美鈴 ……なんで、あんななの？ —夢をもつことができなくなっていたいいけど…一生懸命生きないんだったら、あんなの命、あたしによこせ！

花江 美鈴！

美鈴 ……だつて！ ……だつてそうでしょ…悔しい…悔しいよ…

良彦 ……ごめん…

美鈴 ……謝るぐらいだったら—！

美鈴はリンゴの入っている皿をもって乱暴に二階に上がっていく。  
静寂。

花江 リンゴ、また剥いてこようか？

良彦 いい。

花江 そう。

良彦 ……母さん。

花江 ……ん？

良彦 ……どうして俺なのかな…どうして残ったの俺なのかな…

花江 ……寂しかったわね。—ごめんね。

良彦 ……謝らないでくれよ。

花江 ……ごめんなさい。

良彦 ……だからさ—俺、なんか悪いことしたのかな。なんの罰ゲームなんだよつて。父さんや姉ちゃんみたく、夢もってないのが悪かったのかな。

花江 ……見ようと努力したじゃない。

良彦 ……でも、見れなかった。—あの日、俺、自分の部屋で寝れなかった。

花江 ……そうね。

良彦 ……学校に行きたくなくてさ。—十七日、卒業文集出さなくちゃいけないくて、将来の夢を書かなくちゃいけないかったんだけど…全く思いつかなくて…朝が

来なきやいいって：布団に入らなきや、朝は来ないと思って：

花江 学校に行きたくない日はいつつもそう。二階にあがらない。

良彦 知ってたの？

花江 もちろん。

良彦 そっか……。知らないと思ってた。

花江 誰だと思ってるの？

良彦 え？

花江 あなたの母親よ。

良彦 すごいな：

花江 家族なんだから当たり前でしょ。

良彦 家族か……。

花江 迷ってるの？

良彦 え？

花江 本当は行きたいって思ってるんじゃない？

良彦 ……

花江 嘘をつけない子ね。

良彦 正直、嬉しかった。人に認められたのってほとんどないから。—でもさ、

花江 いいのかな？

花江 なにが？

良彦 だって、俺、何かを思って、何かを目ざしてきたわけじゃないし。それ

なのに：父さんや姉ちゃんは夢があつたわけだし：さつき、姉ちゃんから：

花江 本気で言ったわけじゃないわ。

良彦 俺、十六年間、ずっとそう思われているんだろうなって。—なんか、生

きてるの申し訳なくて—

花江 良彦。

良彦 …… 雁さんの方が一生懸命働いているんだ。俺なんかより……。俺はそう思

う。—姉ちゃんや父さんみたいに、一生懸命なんだよ。

花江 「たれかが一生けんめいはたっている。ぼくはそのひとにほんとうに気

の毒でそしてすまないような気がする。ぼくはそのひとのさいわいのために

いったいどうしたらいいのだろう。」

良彦 ……

花江 『銀河鉄道の夜』。

良彦 ジョバンニ？

花江 そう。小さい頃、寝る前によく読んで聞かせたから、覚えてるのね。

良彦 気の毒だなんては思っていない……。

花江 | りんご、剥いてくるわね。—お腹空いたでしょ。

良彦 ごめん、いらない。

花江 そう。—今日は疲れたでしょ。休みなさい。

花江が階段をのぼっていく。

良彦 …。

良彦は炬燵に入り、うたた寝を始める。  
子どもたちの声が聞こえてくる。

子どもたちの声 ケンタウルス露を降らせろ。ケンタウルス露を降らせろ。ケン  
タウルス露を降らせろ。

子どもたちが出てくる。

子ども1 ねえねえ！

子どもたち なになに？

子ども 今日お祭り行く？

子ども 行く行く！

子ども2 烏瓜流し楽しみ！

子どもたち 烏瓜！ 烏瓜！

と、陽気に歩き始める。

子ども3 ケンタウルス露を降らせ！

子どもたち ケンタウルス露を降らせ！ ケンタウルス露を降らせ！

チャイムの音が聞こえる。

すると、良彦が通っていた小学校の教室となっている。

子どもたちは炬燵で寝ている良彦を囲むように並ぶ。

先生（白鳥）が黒い山高帽をかぶり、黒い外套に身を包み入ってくる。

先生「ではみなさんは、そういうふう川だと云われたり、乳の流れたあとだと云  
われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」

子どもたち「はい！」「はい！」「はい！」

先生「良彦くん」

良彦 あ…はい…えと…星です…

先生「星？」

子どもたち「（笑う）」

先生「夢でも見ていたのか？」

良彦 …あれ？ カンパネルラ？

子どもたち「（笑う）」

先生『『銀河鉄道の夜』かな？ 君のお父さんは童話作家だもんな。』

子ども1 「すげえ。」

子ども2 「童話作家だって。」

子ども3 「すごいねえ。」

子ども4 「ねえ。」

子ども5 「かつけえ。」

良彦 ……みたいなものです…

子どもたち 「(くすくす笑う)」

先生「(苦笑)授業中、寝るのはよくないな。—良彦くん、君の夢はなんですか？」

良彦 夢？

子ども1 (安藤) 「ぼくはロックスターです！」

子ども2 (小原) 「わたしはパティシエです！」

子ども3 (菊池) 「わたしはトリマーです！」

子ども4 (松本) 「わたしは保育士です！」

子ども5 (原) 「ぼくはJリーガーです！」

子どもたちは良彦を見る。

良彦 ……

先生「みんな言ったぞ。ないのか？」

良彦 ……

先生「夢や目標をもつと一生懸命生きられるんだぞ。君のご家族もそうだろう。

—卒業文集全く書いていないけど大丈夫か？ 来週までだからな」

先生は教室から出ていく。

純也が階段から降りてきて、ソファに腰掛ける。

子ども1 「あいつの父ちゃん、働かないで売れない本ばかり書いてんだって」

子ども2 「貧乏なんですよ」

良彦 俺…

子ども3 「毎日同じ服だし」

子ども4 「なんか、お姉ちゃんもおかしいんだって。私のお姉ちゃん言った。」

良彦 自分の居場所がなかった

子ども5 「あいつの家、折鶴ばかり！ 気持ち悪い！」

子ども1 「夢なんか適当に言えればいいのにさ」

子ども2 「きつと童話作家になりたいんだよ」

良彦 全部…

子ども3 「本気で？」

子ども4 「寝言ばかり言ってる家族だから」

子ども5 「あいつ頭おかしいんだぜ」

良彦 家族のせいだ…

良彦の夢が現在へと移り変わる。  
子どもたちは老松鑄造の同僚たちへと変化する。

安藤 良彦さん、行きましょうよ本社！

小原 ぐっちい！ 今日ウチの子高校入試なの！

菊池 田口！ まだ悩んでんの？。

松本 私、心配です…。

原 田口君行くよね！

良彦 要らない…

安藤 俺ロックスター、良彦さん生松鑄造のスター！

小原 受かるように一緒に祈りして〜！

菊池 ウチのことなら心配すんなって！

松本 ご飯食べてますか？

田口 君なら大丈夫！

安藤 俺らここから旅立つ双子的な！

小原 お願い！

菊池 あたしじゃ頼りないかもしれないけどさ！

松本 寝てますか？

原 私が保証する！

良彦 家族なんて…

安藤 良彦さん！

小原 ぐっちい！

菊池 田口！

松本 田口さん！

原 田口君。

良彦 家族なんて要らない！

純也 三月九日十一時四十五分。三陸沖地震。

松本 ! 揺れてる？

菊池 ちよっ!?! 大きい！

安藤 やばいつすよ！

白鳥 避難！

良彦以外の工場の人々は駐車場に避難する。

良彦は炬燵（工場内の部品置き場の棚の前に置いてある台）の上になり、  
虚空を見つめている。

安藤 治まったすね…

原 全員いる？

小原 （携帯電話を耳に当てながら）繋がらない…

菊池 息子さん？  
小原 今、試験中だから。  
菊池 みんないるから大丈夫っしょ。  
小原 だどいいけど…。  
松本 田口さんが！ 田口さんがいません！  
皆 え！？

原たちが工場に向かって走っていく。  
全員が良彦の名前を呼びながら、工場内を探す。

安藤 (見つけて)良彦さん！  
小原 ぐっちい、怪我ない！？  
菊池 なんでそんなところにいるんだよ！？  
小原 心配させないで！  
安藤 早くこっちへ！  
菊池 部品落ちてきたらどうすんだよ！  
小原 揺れのショックで動けなくなっただんじやない！？  
安藤 うっす！  
菊池 あんたも気を付けて！ 怪我したらギター弾けなくなるよ！  
安藤 そんなこと言ったらならないっすよ！

安藤は良彦を台(炬燵)から降ろそうとする。  
しかし、良彦はそれを拒む。

安藤 良彦さん！  
良彦 …。  
安藤 良彦さん！

安藤は良彦をゆっくりと地上へ降ろし始める。

純也 午前中の地震、でかかったな。

安藤は無事に良彦を降ろすと、小原と菊池が良彦に寄り―

小原 ぐっちい！  
菊池 バカ！ 心配したんだからね！  
白鳥 小原さんたち、工場内の被害状況を確認してきてくれますか？  
小原 雁さん―  
白鳥 頼みません。



小原 | はい。 | 行こう。  
安藤 え？ だって良彦さん—  
菊池 いいから。

小原、安藤、菊池は被害状況の確認に向かう。

純也 | 落ち込んでるのか？ こっぴどく叱られたもんなく！

白鳥 どういうつもりですか？ 地震の時は作業を中断して駐車場に避難です。

良彦 ……

白鳥 何もなかったからいいじゃないんです。怪我したらどうするんですか？

良彦 ……

白鳥 (良彦の胸倉を掴み) 何とか言ったらどうなんだ！？

原 (白鳥を良彦から離しながら) 雁さん！ 雁さん！ 落ち着いて！

白鳥 ……すみません。| 君がそんなにいい加減な人間だとは思わなかった。

白鳥が足早に去っていく。

原 田口君、どうしたの？ 雁さんが怒るのも無理はないよ。腕怪我したらどうする？ 君だけでなく周りが大変になるんだよ。雁さんは仕事に対する責任感のことを言っているんだ。自覚ある？ 君はウチにとって大事な職人なんだ。

良彦 (原を見る) ……

原 なに？

良彦 主任が

原 なに？

良彦 主任がそう言うのは—

原 うん。

良彦 俺が本社に…

原 バカ野郎！ そんなくだらないことで心配するか！！

原は立ち去ろうとするが立ち止まり—

原 何か悩んでるの？

良彦 え？

原 悩んでる？

良彦 本社の件ですか？

原 違うよ。| 家にも帰らないで、| 大丈夫なの？ | もし何か悩んでいることがあったら言って欲しい。私じゃ頼りにならないかもしれないけどさ。

良彦 いや、別に…

原 私はね、別にチームという気もないし、家族を気取る気もない。| ウチの

工場のこと。中には職場のことをチームだとか、家族だとか言う人もいるでしょ。でも、私はそう思わない。結局は赤の他人だからね。ただ、必然だと思ってる。君がここに居るのは何かの必然なんだ。私は、そういう縁を大事にしたいし、そういう縁で一緒になった人間を大切だと思ってる。―何もなくてよかった。

原は立ち去っていく。

松本 田口さん：

良彦 はい？

松本 ……今日：ひよっとして：

良彦 (松本を見る)

松本 ……その：

良彦 なんですか？

松本 ―また、そういう目するんですね。

良彦 え？

松本 遠ざける目。

良彦 ……。

松本 みんな心配したんですよ：田口さん避難してこなかったとき。

良彦 ―すみませんでした。

松本 「すみませんでした」：ですか…。関係ないですか？ 私たちじゃ、頼りないですか？ ご家族のこと、安藤君から聞いちゃいました。

良彦 ……。

松本 辛かったんだろうなって：でも、工場みんな、田口さんのこと思ってます。独りじゃないんです。家族とまではいかないかもしれないけど：でも、苦しかったら吐き出していいじゃないですか。十六年も経ってるし。

良彦 ……。

松本 話すとお楽になるって言うじゃないですか。だから、話して―

良彦 (呟くように) なんですか？

松本 え？

良彦 なんて話さなくちゃいけないんですか？

松本 だって：

良彦 それって―松本さんが楽になりたいだけじゃないんですか？

松本 そんな：

良彦 ―心配したいだけなら―。

松本 そうじゃない！―ごめんなさい。―力になりたいんです。あなたの力になりたいたいんです。：ずっと苦しそうだから：

良彦 苦しそう：？

松本 はい…。

良彦 決めるのは松本さんじゃないです。

松本 |。  
良彦 もういいですか？ ラインに戻らなくちゃいけないので。  
松本 …。

良彦はリュックから、筆記用具を持って、炬燵に座る。  
松本は佇んでいる。  
良彦は折紙に何かを書き始める。

純也 あの子、あのあとしばらく立っていたぞ。―お前はホントだめだな。い  
いか、ああいう時は―

松本 話すと楽になるって言うじゃないですか。だから、話して―

純也 ここ！ ここで、「それじゃ、今晚飲みながら聞いてくれる？」って言え  
ば―

松本 あ…私で…私なんかでよければ。

純也 となる！ いや、むしろ―「あれ？ 松本さんって独り暮らし？」と聞  
けば―

松本 あ…はい。…晩御飯作りましょうか…？ 美味しいかわからないけど。  
―今日は六時にはあがれます！

松本は事務室へとかけていく。

純也 なあ！

良彦 (黙々と折り紙に書き込んでいる)

純也 すまん、ふざけ過ぎた。―怒ってんのか？

良彦 怒ってなんかいないよ。

純也 そうか？

良彦 うん。

純也 しかし、良い人たちだな。―温かいというか、なんとというか。―良い人  
たちと出会ったなあ！

良彦 …。

純也 ―何書いてるんだ？

良彦 仕事のこと。

純也 …俺には分からんな。

良彦 そうだね。

純也 …

良彦 …(二枚目を取る)

純也 良彦君、俺、仕事したことないからわかんないんだけど、仕事のことつ  
て折り紙に書いて良いもんなの？

良彦 本当はダメだね。

純也 そうだよな。

良彦 うん。

純也 何を書いているんだ？

良彦 書置き？

純也 ん？

良彦 俺いなくなっても、ライン回るように。――しばらくは涼子さんが製造と品管を掛け持ちするだろうから、あまり負担にならないように。――あと、試作品の強度的なこと、雁さんに。

純也 良彦：お前：ついに決心がついたのか。

良彦 ――そうだね。――出て行く。――ここから出て行く。

純也 うん！ みんなの恩に報いるためにもな！

良彦 ……。

純也 ――？ そして？

良彦 さあ。

純也 さあって、その次だよ！

良彦 ――分からない。

純也 愛知だろ？

良彦 ――行かないよ。

純也 どうして？

良彦 ――行っても仕方がないから。

純也 じゃ、どうして出て行く。

良彦 ――居ても仕方がないから。

純也 仕方がないって ……ここはお前の居場所だろ。――みんながお前のことを

良彦 ……思っているのが分かったろ。

純也 ……思っていない。

純也 なに？

良彦 ――人と関わろうなんて思っていないし、居場所が欲しいなんて思ったことないよ。俺は独りでいたいだけなんだ。

純也 本気でそう思っているのか？

良彦 ああ。

純也 ――矛盾してる。

良彦 何が？

純也 どうして、それを書いている。

良彦 出て行くから。

純也 そうじゃない。――どうして人のために書いている。

良彦 ……。

純也 どうしてだ？ 他人と関わりたくないんだよな？ だったら、勝手にいなくなればいいだろ？ どうして、「負担にならないように」って書置きを残す？

良彦 ……。

純也 何に意地をはってるんだ？ ――お前はここの工場の人たちのこと大切だ

と思ってるんだろ？

良彦 | 思っていないよ。

純也 | 良彦 |

良彦 | 思っていないって言ってるだろ！

純也 |

良彦 | だから：ひどいこと言ったり、相槌も適当にしかうたなかつたり：、嫌いなんだよ。おせっかいばかりで。

純也 | 良彦、「好き」の反対の言葉、知ってるか？「嫌い」「憎い」：違う。「無視」：「無関心」だ。自分の中に相手がいらないからな。でも、お前は違う。

本当は好きなんだよ。大切なんだ。| 嫌いを装ってるだけだから、みんなお前が心配なんだ。

良彦 |

純也 | 愛知に行こう。

良彦 |

純也 | それじゃ、ここに残ってがんばるのか？

良彦 |

純也 | | 良彦。

良彦 | なんで死ねなかつたんだよ：なんで建物崩れなかつたんだよ：あの時は、あんなにあっさり崩れたのに！ なんてだよ！ なんてだよ！

純也 | お前：やっぱり：

良彦 | 死ぬるって思った。| やつと死ぬるって：

純也 | 何言ってるんだ。| お前：

純也はリュックのポケットから、作文を取り出し |

純也 | | 読んでみる。

良彦 | やだよ。

純也 | いいから。

良彦 | いやだ。

純也 | いいから！ (強く作文を良彦に押し付ける)

良彦 | いやだ！

純也 | 読め！

良彦 | :。| 阪神大震災から、もう五年が経ちました。けれども、あの日のことをはつきりと覚えています。夢を追い続けた父と姉、それを支えていた母を一度に失った日を：。僕はその日、台所で寝ていました。五時四十六分。

目を覚ましたのが先なのか揺れ始めたのが先なのかよく覚えていません。耳に入ってきたのは「ゴー」と響く地面の音。次の瞬間、ぼくは荒れ狂った波の中にいるようでした。僕は何かを叫んでいました。でもその叫び声は蛍光灯やグラス、食器が「バリバリ」と、強く地面に打ち付けられる音にかき消されていきました。次の瞬間、僕の目に入ったのは、家中の窓や障子が | ま

るで紙できてきているみたいに脆く、そして容易く崩れていく光景でした…そして、姉が寝ていた二階が…（読めない）」

純也 …すまん…

良彦 …

純也 最後のところだけでいいから。

良彦 …「僕は家族の分まで生きます」…。

純也 な！（良彦から作文を取り上げ）ここにしっかりと書いています！ お

前は俺たちの分まで生きるんだよ。

良彦 …。

純也 お前がそう決めたんだ。—あの日から十六年も経った。いい加減に前を向いて—

良彦 十六年も経ったってなんだよ！

純也 良彦…

良彦 俺には昨日のことなんだ！ —！？

良彦の顔に懐中電灯の光があたる。

白鳥 やつぱり居ましたか。

白鳥が休憩室へと入ってくる。

純也は作文を炬燵の上に置き、ソファ—に腰かける。

良彦 …はい。

白鳥 電気つきますよ。

良彦 …はい。

室内の電気がつく。

白鳥 （炬燵の上の用紙に気が付き）これ…

良彦 あ…

白鳥は作文を取り、読む。

良彦 …。

白鳥は読み終わる。

白鳥 …。

白鳥は作文を丁寧に畳み、炬燵の上に置く。

そして、肩にかけていたスープジャーを開け――

白鳥 飲みませんか？

良彦 え？

白鳥 家内特製のオニオンスープです。――いい歳して、なに気取ってんだって感じですがね――これが意外といけるんです。――腹減ったでしょう。

良彦 ……はい……

白鳥 座って。

良彦 はい……

良彦は炬燵に座る。

白鳥はスープジャーを良彦の前に置く。

良彦はゆっくりと一口飲む。

また一口。

白鳥 手前味噌ですが、美味しいでしょう。――甘みとコクがあってね。――私に、これにご飯を入れるんです。パンじゃなくてね。――雑炊みたいで、美味しい。――家内にはリゾットだって言い直されるんだけどね（笑う）

良彦はスープジャーから口を離し、黙る。

白鳥 口に合いませんでしたか？

良彦 いえ、美味しいです。

白鳥 よかった。

良彦 ……

白鳥 ―すみませんでした。

良彦 （白鳥を見る）

白鳥 思わずカッとなって…年甲斐もなく…ダメですね。

良彦 こちらこそ…すみませんでした…

静寂

白鳥 冷めない私に。夜はまだ冷える。風邪、引かないように暖かくして、ゆっくり休んで。――明日、また。

良彦 明日……また……

白鳥は休憩室から出て行くとする

良彦 雁さん。

白鳥 ん？

良彦 ……。

白鳥 ……？

良彦 炭素量だと思っんです。――強度あげるには、炭素量を変えるしかないと思っいます。

白鳥 炭素量か…なるほど。どれぐらいですか？

良彦 それは実際に明日…（言いかけて気づき）

白鳥 田口君？

良彦 ……

純也 お前には明日がある

良彦 ……

純也 明日を考えることができる

良彦 ……

純也 それだけで十分じゃないか？

良彦 俺…もう、来ません…

白鳥 工場に？

良彦 はい。

白鳥 どうして？

良彦 ……。

白鳥 田口君。

良彦 ……殺したんです…。俺…家族を殺したんです…

美鈴が階段からおりてきて、階段に腰掛ける。

白鳥 君の家族は――

良彦 十六年前の地震で…

白鳥 だったら――

良彦 俺…家族なんていらんないって…父さんも姉ちゃんも…母さんもいなくなればいいの…って…死んでしまえばいいの…って…思ってました……したら、本当に…

白鳥 君のせいじゃない。

良彦 七十二時間の壁…あの地震のあとに知りました――俺、あの時怖くなっただけ…目…目の前の変わり果てた家を見て…周りでは助けを呼ぶ声、悲鳴…怒鳴り声…突然目覚ましのベルが聞こえてきた――姉ちゃんの目覚まし時計です。――おかしいのは家族の誰も止めに来ないんです。いつもだったら、誰かが止めるのに。――その時、父さんも母さんも、姉ちゃんも瓦礫の下にいるんだって気づきました…俺、無我夢中で瓦礫の中を探しました。…したら…目覚まし時計だけ出てきました…俺…鳴り続ける目覚まし時計を持った状態で近所の人に助けられました…。俺が思わなかったら…ひよっとしたら…。俺がもっと…もっと必死になっって探せば…七十二時間の間に探せば…死ななかつたんじゃないかって…





良彦 父さん、母さん、姉ちゃん。—ごめん。—俺：今日：本当は怖かった。もしも：あのまま押しつぶされるかもって思うと……。死にたいって思っ

たのに、死ぬって思うと怖かった：

純也 なんだ！ 今更気づいたのか？

美鈴 ダメ彦はやっぱりダメ彦だ。

花江 お姉ちゃん。

美鈴 だって、そうでしょ。

良彦 あのさ：俺：生きてていいかな？ —したいことって何か分からないけ

ど：父さんたちみたいにかっこよく生きられないけど：何ができるのかわか  
らないけど：生きてていいかな：

純也 良彦。—いいに決まってるだろ。—なあ。

花江 はい。

良彦 ：ありがとう：

美鈴 あゝ！ 長かった。

純也 やつといけるな。

美鈴 うん。

良彦 —どこに？

「銀河ステーション」「銀河ステーション」と周りから声が響いてい来る。

美鈴と花江は立ち上がり、銀河ステーションへと向かう。

良彦 母さん！ 姉ちゃん！

純也 あ！ かっこよくなるはない。

良彦 え？

純也 寝言みたいな夢を追って、何にもならんかった。

美鈴 あたしたち、寝言家族だから。

純也 恥ずかしい思いさせたな。面目ない。

良彦 そんなことない！ そんなことないよ！ 俺はかっこいいと思う！

純也 —そうか。—お前がそう思うならそれでいい。—ありがとう！

良彦 ありがとうって：こっちのセリフだよ。—ありがとう！

花江 あなた。

純也 おう、そうだった。—これ。

純也はズボンの脇ポケットから折鶴を一つ出し、良彦に渡す。

良彦 折鶴？

純也 俺らが俺らの願いが叶うことを祈って折った。

花江 折鶴って人のためじゃなく自分のために折るものだから。

良彦 願い？

純也 お前がお前らしく生きられますように。

良彦 父さん：

美鈴 (渡しながら) あたしも。―変な女にひっかからないこと。

純也 美鈴：

美鈴 冗談！―まっすぐ前を見られますように。

良彦 姉ちゃん：

花江 (渡しながら) はい。―良彦が病気になりませんように。―怪我しませ  
んように。―元気に過ごせますように。

良彦 母さん：

花江 良彦：

花江が良彦を優しく抱きしめる。

純也 俺も！

純也が抱きしめている花江の背中から良彦を抱きしめる。

美鈴 あたしも！

美鈴が純也の背中から良彦を抱きしめる。  
静寂。

良彦 ……何これ：

花江 おかしいわね。

純也 おかしいか？

美鈴 いいんじゃない。

良彦 ……うん…。

「銀河ステーション」「銀河ステーション」と周りから声が響いて来る。  
良彦から離れる家族。

良彦 よし、行くか。

美鈴 うん。

花江 チケット持った？

美鈴 ずっと持ってる。

良彦 |。

純也 そんな顔するな。

良彦 ごめん…。

純也 謝るな。

良彦 ごめ—うん。

汽笛。

銀河鉄道に乗車する死者たちが休憩室を行き来し始める。  
その格好は黒い山高帽に黒い外套。

純也 混んできたな。

良彦 父さん、母さん、姉ちゃん：いってらっしゃい。

純也 |いってきます。

美鈴 早くしないと席取れないよ。

純也 わかったわかった。

美鈴と純也が銀河鉄道に乗り込んでいく。

花江 大丈夫？

良彦 |大丈夫。

花江 そう。

良彦 ありがとう。

花江 良彦|ありがとう。

花江は銀河鉄道に乗り込んでいく。

汽笛の音。

良彦は銀河鉄道を見送る。

良彦 ありがとう：本当にありがとう：

時間は過ぎ：三月十一日。

安藤の旅立ちの日。

休憩室ではささやかな送別会が開かれている。

良彦 いってらっしゃい。

工場の面々が拍手をする。

安藤 あざっす！ ホント、あざっす！

小原 ぐっちいこと田口良彦君からの感謝の言葉でした。|ちよつと、ぐっち

い、よかった。|よかった。原君より良かった。

原 何それ！？

良彦 いえ：

原 私もよかったよね？

安藤 よかったっす。

原 どっち良かった？

安藤 え：

菊池 そういうところ。

原 え？ どういうところ？

菊池 いいからいいから。 —進めて。

小原 では、安藤君から。

安藤 うすーはい。えつと、今日は本当にあざーありがとうございます。ぼく、安藤海翔は今日、三月十一日をもって生松鑄造を卒業します。

菊池 どっかで聞いたことあるフレーズ。

小原 ちゃちゃいれない。

安藤 へへ。いや、本当はこっそりいなくなろうかって思っていたんです。なんか、やっぱり淋しいから。四時の新幹線だから、みなさん仕事している間に。そしたら、良彦さんに見つかって：良彦さん、みなさんに教えてくれて：。でも、やっぱり、みなさんに最後あいさつできて良かったです。—あの、自分、どこまでできるか分からないけど、がんばってこようと思います。—ここで学んだこと生かして、精一杯がんばってこようと思います。—今まで、本当にありがとうございます！

みな、大きな拍手。

小原 安藤！！ ビッグにならなくても応援するから！

安藤 —ありがとうございます。

菊池 新幹線大丈夫なの？

安藤 まだ一時間以上ありますし。

松本 一昨日じゃなくてよかったですね。

原 九日の地震な。—久しぶりに揺れたもんな。

小原 はいはい。続けるよ。—では、ささやかではありますが、安藤君へ贈り物です。—雁さん。

白鳥 はい。—安藤君、知っているかもしれないけど：これ。

白鳥は千羽鶴を出す。

安藤は皆に向かって一礼。

安藤 ありがとうございます。—俺—ん？

地面が揺れ始める。

松本 二〇一一年三月十一日十四時四十六分十八秒。東日本大震災発生。

安藤 また地震すか？

小原 この前より弱いん—ん？ —ちよっと長くない？

菊池 これ、やばくない。

地震が大きく横揺れを始める。  
白鳥、安藤、原は九日の良彦を思い出し――

白鳥 田口――

原 田口――

安藤 良彦――

良彦 炬燵の下に！

安藤 え？

皆、良彦を見る。

良彦 ――炬燵の下に隠れて！

皆 (ポカンと良彦を見ている)

良彦 早く！

安藤 はい！

小原 全員は無理！

原 女性だけでも！

安藤 俺たちは！？

白鳥 体を低くして、頭を守る！

良彦 早く！

小原、菊池は炬燵の中へ隠れる。原たちは身を低くして、頭を守る。

良彦 松本さん！

松本 動けません！

良彦は松本の傍に倒れないように気を付けながら向かい、松本の腕を取る。

松本 (良彦の腕にしがみつきながら) 怖いです！

良彦 俺も怖いです！

松本 ――。

良彦 大丈夫。

良彦は松本を体に寄せ、松本の頭を守るように抱きしめ、態勢を低くする。

揺れが大きくなる。

そして、電気が消える。

二〇一二年三月十四日水曜日 休憩時間  
生松 鑄造 休憩室

炬燵の周りには良彦・菊池・松本がいる。

菊池と松本は昼ご飯を食べ終えたようで、思い思い休息している。

良彦は鶴を折っている。

階段には姉、美鈴が腰かけている。

ソファーには父、純也と母、花江が腰かけている。

菊池 あく、時間だろ。

松本 午後一は何するんです？

菊池 製造。

松本 納期近いでもんね。

菊池 アクア、売れすぎなんだっつうの。

松本 半年待ちですって。

菊池 おっつかない…。

松本 土日返上ですから。

菊池 休みたい…。

松本 休みたいです…。

菊池 休みたい…。

松本 休みたいです…。

菊池 主任！

良彦 はい。

菊池 聞いてた？

良彦 聞こえてました。

菊池 休みたい！

良彦 …休みたいですよね。

菊池 ものすごく！ ものすごく！ ものすごく！

良彦 工場長に掛け合ってみます…。

菊池 頼りになる…。

そこに白鳥が休憩室に来る。

白鳥 いたいた。―菊池さん。

菊池 はい？

白鳥 ちょっと強度が怪しいのがありまして。

菊池 今ですか？

白鳥 できれば…

菊池 はい。

良彦 お疲れ様です。

菊池 ―行ってきました。

菊池と白鳥は休憩室を出て行く。

すると、廊下から声が聞こえてくる。

小原 涼子ちゃん！ 雁さん！ じゃーん！

菊池 ちよつと！ どうしたの？

安藤 あ、ちよつと帰って来たんで。

白鳥 ごゆっくり。

安藤 あざっす。

菊池 夜空いてる？

安藤 はい。

菊池 飲みに行くよ。――主任の愚痴を聞いてもらうからね！

安藤 うす。

その様子を聞いていた松本は口を押えて笑う。

ばつが悪そうな良彦。

小原が休憩室に入ってくる。

小原 ぐっちい！ ワカちゃん！ お客さん！

安藤 お久しぶりっす。

私服姿の安藤が休憩室に入ってくる。

松本 聞こえてたよ。

安藤 お元氣そうで。

良彦 おう。

安藤 あれ、また折ってるんすか？

良彦 え？ ―あ、うん。

安藤 集中力高めましょ的な？

良彦 そうだな。

小原 まだ千羽鶴持ってる？

安藤 おかげさまで、ちよこつとずつ。

小原 ホント？ CD屋さんに行っても、みないよ。

安藤 そこまでは売れてないっす。

松本 今日はどうしたの？

安藤 この前の日曜、ちようど一年だったじゃないですか。――沿岸の方でチャリティーライブあって。

松本 歌ったの？

安藤 ―手伝いを。――復興まだまだって感じすね。

良彦 そうだな。

小原 ぐっちい、時々、沿岸に行ってるんだって。

安藤 そうなんすか？



良彦 まあ—できること限られてるけどさ。

安藤 そつすか。—あ！主任になったって聞いたつすよ！スパルタらし  
いじゃないすか！

良彦 そんなことないよ。

安藤 俺ももう少しいたらよかったつす。

良彦 夢追うんだろ？

安藤 うす。

小原 はい！時間！

安藤 ええ？

小原 いろんな人に顔見せに行くんだから。分刻み！行くよ！

小原が安藤を引っ張る—

安藤 今日、飲みましょうよ。—皆で！

良彦 —分かった。

安藤と小原は休憩室を出て行く。  
部屋に残る良彦と松本。

松本 がんばってるんですね。

良彦 そうですね。

松本 …。

良彦 …。

松本 私、さきに行ってます。

松本は立ち上がる。

良彦 あの。

松本 はい？

良彦も立ち上がり、自分のリュックのところへ行き—

良彦 —一年前はそれどころじゃなかったですし…

松本 はあ。

良彦 今年もいただきましたし…

松本 はあ。

良彦 大したものじゃないですが—（リュックから小さいプレゼントを出し）  
—お返しです。

松本 え？

良彦 はい。

松本 あ：今日：

良彦 はい。

松本 | ありがとうございます：ございます。

良彦 いえ：こちらこそ。

そこに原が入ってくる。

原 あ、いた！

松本 工場長。

原 午後、銀行来るでしょ。| もう一度帳簿確認したいんだけど。

松本 はい。

原が休憩室を出て行く。

松本 | 行ってきます。

良彦 行ってらっしゃい。

松本 | はい。

松本も休憩室を出て行く。

良彦もリュックを背負い、休憩室を出ていこうとするが、炬燵の上の折鶴が目に入る。

炬燵に向かい、しゃがみ、折鶴を開く。

良彦 父さん、母さん、姉ちゃん、行ってきます。

純也・花江・美鈴 行ってらっしゃい！

良彦は三人の声が聞こえたように感じた。

良彦 あれから十七年経った。まだなのか：もうなのか：俺には分からない。

それでも、大切な家族がいたことは忘れない。| 寝言のよう夢を追い続けた家族を。| 夢を叶えるため、必死に努力した姉。

美鈴は階段をのぼっていく。

良彦 夢を叶えるため、懸命に生きた父。

純也は部屋を出て行く。

良彦 二人を支えた母。

花江は部屋を出て行く。

良彦 俺—したいことって何か分からないけど—父さんたちみたいにかっこよく生きられないけど—何ができるのかわからないけど—でも、がんばるよ。  
—行ってきます。

良彦は休憩室を出て行く。

机の上には折鶴が残っている。

【終】